唯識派の三性説を再考する
――三性説の再構築――

大家　秀夫

一　問題の所在
二　唯識派における三性説
三　唯識派における三性説の問題点
四　三性説の再構築
五　再構築された三性説の利点と適用例

一　問題の所在

唯識派における三性説とは、よく知られているように、存在のあり方を認識主観とのかかわりによって遍計所執性、依他起性、円成実性の三つに分けて捉える説である。このうち、依他起性は「他によるもの」すなわち、他に依って起るものであるが、無著・世親を始めとする唯識派においては、それを「虚妄なる分別」「虚妄分別」とする。さらに、遍計所執性は、「妄想されたもの」であって、虚妄なる分別において、所取と能取、すなわち客観と主観の「二つのもの」が実在的に考えられていることだ、とする。唯識派においては、依他起性も遍計所執性も識に関わることであって、「三種の実在」[1]とは言うものの、存在や存在の有り様（態様）を議論しているのではなく、存在の認識の仕方、認識のあり方、あるいは、認識に現れた存在形態を述べている。これが第一の問題であるが、これを議論し出すと、人間の苦からの解脱を目的とした仏教の本来の趣旨から逸脱するので、しばらく横に置く

こととする。むしろ、より一層重要な問題は、唯識派における依他起性も遍計所執性もともに存在の認識の仕方であって、円成実性の観点から見て明確に区別されていない点にある。本稿においては、円成実性の観点から見て、依他起性と遍計所執性を明確に区別して、それぞれを規定し直し、円成実性への道筋を提示したい。

これは、無著・世親に始り、中国法相宗を経て奈良朝の法相宗から現代に至るまでの千五百年にわたる唯識派の伝統への問題提起である。

二　唯識派における三性説

議論の出発点として先ず、唯識派における三性説を次の文献に基づいて確認する。

①世親（長尾雅人訳）『三性論』（『大乗仏典15』、中公文庫、二〇〇五年）

②弥勒（本頌）・世親（注釈）（長尾雅人訳）『中辺分別論』（同右）

①世親（長尾雅人訳）『三性論』には次のように三性が定義されている。

一　三性の名称

［一］妄想されたもの（遍計所執）、他によるもの（依他起）、および完全に成就されたもの（円成実）、まさしくこれら三つの自性がある。それは剛毅なる人々（菩薩）にとって、学問の対象としてきわめて深いものといわれる。

二　三性の一般的説明

［二］（何かの認識において）あらわれるもの、それが「他によるもの」であり、いかにあらわれるか（という態様）が、「妄想されたもの」である。（前者は、他の）原因にもとづいて起るから（「他によるもの」）であり、（後者は）分別のみとしてあるから（「妄想されたもの」）である。

［三］そのあらわれる主体（依他起性）にとって、かのあらわれた態様（遍計所執性）が、常に（まったく）存在しなくなった状態、これが「完全に成就されたもの」（円成実性）であると知るべきである。それは（もともと）変化するという性質のないものだからである。

［四］そのばあい、何があらわれるのか。真実ならざる分別が（あらわれるの）である。いかなる態様であらわれるのか。（主観と客観との）二つのものとして（あらわあれるの）である。それ（真実ならざる分別）に実在性がないとはどういうことか。それ（主観・客観の二つのもの）として（実在するのではないこと）である。そのことはまた、かれ（真実ならざる分別）の本来のあり方（法性）、すなわち二つのものがないという（法性）にほかならない。[2]

これを私の理解に基づき敷衍すると、次のようになる。

三性は「三つの自性」の略でそれぞれの名称はよく知られているように、「妄想されたもの（遍計所執）」、「他によるもの（依他起）」、「完全に成就されたもの（円成実）」である。この三性は、認識の中において（すなわち、識の中において）存在しているように見えるものについて議論している。すべては識の中での出来事である。この大前提を見逃すと唯識派の三性説を理解することはできない。

依他起とは、「何かの認識においてあらわれるもの」である。今、私が机を見ているとしよう。依他起とは、机そのものではなく、目にしている机が認識の中にあらわれたものである。私が机を認識すると頭の中に机が像としてあらわれる、あるいは「机」という言語が形成される。これが「何かの認識においてあらわれるもの」であり、依他起と定義される。頭の中であらわれた机の像、あるいは「机」という言葉は、他のもの、本やノートやペンなどと区別する作用を持っている。この机は、机であって、本やノートやペンなどではない。机は、他のものと区別されることによって認識される。すなわち、他のもの（本やノートやペンなど）を原因として、机という認識が起るのである。だからこそ、他に依って起る、「依他起」というのである。「そのあらわれる主体（依他起性）」というのは、認識の中にあらわれる像や言葉であり、他と区別されるものである。認識の中であらわれるものは、像

や言葉であるが、その本質は他と区別する作用を持つものである。だから、「分別」があらわれると世親は言うのである。この「分別」こそが、他のものと区別する作用を持つのである。この「分別」に「真実ならざる」と形容されるのは、この「分別」は次の円成実性から見て真実ではないからである。

次に、遍計所執性とは、認識の中で依他起のあらわれ方、あらわれる態様を言う。そのあらわれ方（態様）は、認識する主体（能取）と認識される対象（所取）という二取の分別としてあらわれる。私が「これは机だ」と認識するとき、認識する主体（私＝能取）は、認識される対象（机＝所取）を他のもの（本やノートやペンなど）と区別する分別によって認識している。この能取・所取の二取がある限り、その分別は「真実ならざる」ものであり、「虚妄なる分別」「虚妄分別」と呼ばれる。認識において能取・所取の二取にあることが真実ならざる認識をもたらすために、「妄想されたもの」「構想されたもの」という意味で、遍計所執性と言われる。

そして、認識において能取・所取の二取から完全に離脱することで、物事の真実の姿を見ることができる。すなわち、認識においてあらわれる依他起性が、そのあらわれる態様（能取・所取の二取に基づく分別）から離脱することで、不変なる真実の姿が顕れる。その捉え方と存在が円成実性と言われるものである。

この『三性論』を翻訳した長尾雅人も次のように注釈する。

「真実ならざる分別」が依他起であり、その分別において、所取と能取、すなわち客観と主観の「二つのもの」が実在的に考えられていることが遍計所執であり、その実在性への執着が払拭されて非存在となるとき、円成実性である。（中略）三性の説明を要約すれば、次のごとくである。

（一）あらわれるもの、他の因によるもの、真実ならざる分別‥‥依他起性

（二）あらわれた態様、ただ分別されたあり方、所取・能取の二者の実在‥‥遍計所執性

（三）あらわれるものが、あらわれた態様から離脱すること、不変なること、所取・能取の二者のないこと‥‥円成実性[3]

すなわち、世親においては、依他起性とは、「他の因によってあらわれるもの」であって、それは真実ならざる分別なのであり、遍計所執性とは、その真実ならざる分別のあらわれ方、すなわち、所取・能取の二取としてあらわれるものなのである。ここで、遍計所執性を「もの」と規定しているが、その実際のところは、所取・能取という虚妄なる分別によって捉えたものなのだから、識の中での存在、従って、認識論なのである。依他起性も真実ならざる分別であって、認識を論じている。依他起性も遍計所執性も唯識派においては認識論であることに注意する必要がある。

②弥勒が本頌を造り、それに世親が注釈を付けた『弁中辺論』も唯識派の依拠する重要な論書であるが、これに基づいて三性説を見る。漢訳、読下し、サンスクリット語からの翻訳の順に記載する。

頌曰

唯所執依他　及圓成實性
境故分別故　及二空故説　［一・五］[4]

論曰。依止虚妄分別境故。説有遍計所執自性。依止虚妄分別性故。説有依他起自性。依止所取能取空故。説有圓成實自性。[5]

頌に曰く、

唯、所執と依他　及び円成実性は
境なるが故に、分別なるが故に　及び二空なるが故に説けり。［一・五］

論じて曰く、虚妄分別の境なるに依止するが故に、遍計所執自性有りと説く。虚妄分別の性なるに依止するが故に、依他起自性有りと説く。所取・能取の空なるに依止するが故に、円成実自性有りと説く。

（訳）

妄想されたもの（遍計所執性）、他に依るもの（依他起性）、完全に成就されたもの（円成実性）、（と言う三種の自性）が

説かれたのは、（順次に）対象であるから、虚妄なる分別であるから、また二つのものが存在しないからである。［一・五］

（四種に顕現する識としての虚妄なる分別において、）対象は、妄想された自性である。虚妄なる分別と言うこと（それ自体）が、他に依ることの自性である。（虚妄なる分別における）知られるものと知るものとが（如何なる意味においても）存在しないということが、完全に成就された自性である。[6]

これを図式化して端的にまとめると、次のようになる。

・妄想されたもの（遍計所執性）＝境、（虚妄なる分別における）対象

・他によるもの（依他起性）＝分別、虚妄なる分別

・完全に成就されたもの（円成実性）＝二空、二つのもの（知られるものと知るもの）が存在しないこと

これは、『三性論』において、「依他起性」を虚妄なる分別とし、「円成実性」を所取・能取の二取から離れることとしているのと同じであるが、「遍計所執性」については、あらわれた態様、ただ分別されたあり方、所取・能取の二者の実在としていたことから、一歩踏込んで、虚妄なる分別における対象、境としている。このことに注意しておこう。

三　唯識派における三性説の問題点

前項で見た唯識派における三性説は何が問題なのか。それは、次の三点において問題であると考えられる。

（一）唯識派は三性説を「三種の実在」[7]と称して存在論であるかように言いながら、その実、認識論しかないこと。

（二）それ故、他によるもの（依他起性）と妄想されたもの（遍計所執性）との区別が明確でないこと。特に、依他起性の規定の仕方に大きな問題があること。

（三）そのため、完全に成就されたもの（円成実性）の規定の仕方に疑問の余地が残ること。

この三つの疑問点を一つ一つ見ていこう。

（一）唯識派は三性説を「三種の実在」[8]と称して存在論であるかように言いながら、その実、認識論しかないこと。

これは、前項で指摘した通り、依他起性は『三性論』で「（何かの認識において）あらわあれたもの」[9]であると定義されているから、識の中で顕現するものである。従って、依他起性は、眼前で起っている事物事象や世界の有り様を指しているのではなく、現代の我々の言葉で言えば認識に関わる用語なのである。また、遍計所執性は、『三性論』で「（何かの認識において）いかにあらわれるか（という態様）」[10]と規定されているから、これも識の中での出来事である。そして、「（後者は）分別のみとしてあるから（「妄想されたもの」）である」[11]と認識に関わることを明示している。ところが、一方、『中辺分別論』によれば、「妄想されたもの（遍計所執性）は、（虚妄なる分別における）対象」[12]であると言う。ここからは、遍計所執性は認識対象を指すものと読取れる。しかし、それは眼前の事物事象そのものではなく、あくまでも識の中で構成されたもののことなのである。すなわち、事物事象の存在の有り様や宇宙・世界の有り様そのものではなく、あくまで頭の中で構成されたものとして、議論しているのである。

また、現代において唯識派の権威の一人と思われている竹村牧男も、遍計所執性を対象そのものとせずに、分別の働き、及び分別の働きを根拠として妄執されたもの、としている。世親『唯識三十論』に護法が注釈を付けた『成唯識論』は法相宗の聖典であるが、そこの遍計所執に対する竹村牧男の解説を引用する。

「論に曰く、周遍して計度す、故に遍計と名づく。」

分別（vikalpa）といってもよいかと思うのですが、とくに遍計（parikalpa）という語を使っています。とりわけ一切法にあまねく、実体的な存在を分別していくはたらきのことを、遍計と名づけています。

「品類衆多なり、説きて彼彼と為す。」

いろいろなものを分別することがあるから、そこで彼彼と重ねて述べているのです。

「謂く、能遍計の虚妄分別ぞ。即ち彼彼の虚妄分別に由りて、種種の所遍計の物を遍計す。」

能遍計とは、あまねく分別するような虚妄分別のことです。そのいろいろな虚妄分別によって、様々に分別されたものを

分別します。様々なものが分別され執著されます。

「此の妄執する所の自性と差別とを、総じて遍計所執の自性と名づく。」

誤って執著した所の主語的に捉えられたもの、あるいは主語・術語の中で何らかあるものとして捉えられたもの、そういうすべての妄執されたものを遍計所執性と名づけるのであります。[13]

ここでは、遍計とは、「一切法にあまねく、実体的な存在を分別していくはたらきのこと」、「能遍計とは、あまねく分別するような虚妄分別のこと」としている。そして「そういうすべての妄執されたものを遍計所執性と名づける」のだと言う。ここで言う「妄執されたもの」の「もの」とは、識の中で構成されたものであって、対象そのものをいうのではない。[14]

このように、唯識派においては、存在の有り様そのものを議論せず、認識の中に現れたものや認識の中に現れる態様を議論する。遍計所執性は境、対象を議論しているが、それは認識に関わる、識の中で構成されたものを議論しているにすぎない。だからこそ、「(後者は) 分別のみとしてあるから（「妄想されたもの」）である」[15]と世親もいうのである。遍計所執性とは、実際のところ、境、対象そのものではなく、分別であり、虚妄分別であり、妄執されたものなのである。私は、遍計所執性が認識に関わるものであることに異論はない。

問題は、依他起性である。唯識派にとって、依他起性は「真実ならざる分別」「虚妄なる分別」であって、純粋に識なのである。遍計所執性のように認識の対象ですらない。従って、次のことが言える。

(二) それ故、他によるもの（依他起性）と妄想されたもの（遍計所執性）との区別が明確でないこと。特に、依他起性の規定の仕方に大きな問題があること。

前項で述べたように、唯識派においては、依他起性も遍計所執性も認識に関わることを議論しているのであって、存在論はない。それ故に、依他起性は「虚妄なる分別」と言われ、遍計所執性は「分別のみとしてある」と言われ、その区別は明確ではない。一応、「虚妄なる分別」と、その「虚妄なる分別」による認識対象との区別はある。しかし、その差はわずかであることをいくつか例を挙

げて示そう。例えば、『三性論』において、

・遍計所執性について「有なるものとしてとらえられているから、しかもまた、絶対にそれは非存在なのである」[16]と言い、依他起性について「迷乱としてはあるが、あらわれているようには実在しない」[17]と言う。果してこの二つのものの区別はどこにあるのか。

・遍計所執性について「対象が妄想されたとき、それは（主観・客観の）二種としてある」[18]とし、依他起性について「二つのものとしてあらわれる」[19]と述べる。これは依他起性について「主観・客観の二つのものとしてあらわれる」ということだから、遍計所執性についての「主観・客観の二種としてある」との区別の差は、ほんのわずかである。

・「妄想されたものと他によるものとは、」すなわち遍計所執性と依他起性はともに「汚染を本質とするもの（雑染相）と知らねばならない」として、「汚染」に関しては同じだと言う。

・遍計所執性について「無なる二をその自性とする」[20]と言う。これは、真には無であるのに能取・所取の二取で捉えることを本質とする意味である。依他起性について「あらわれているような二を自性とする」[21]とし、円成実性はこれの否定であるとする。「あらわれているような二」とはまさに、主観・客観の二つを指す。となると、遍計所執性と依他起性の違いはどこにあるのか。

以上は、遍計所執性と依他起性の違いが明確でないことの例を挙げたのであるが、その原因は、依他起性を虚妄分別とする規定の仕方に唯識派の限界があるように思われる。同じく『三性論』から例を挙げよう。

・「言語的表示は、妄想されたもの（遍計所執性）の本質であり、言語的に表示する主体が、他のもの（すなわち、他によるもの、依他起性）の本質であり」[22]と言う。これは、言語的表示行為と言語的表示する主体との区別を言っているのだが、言語的表示の主体が、依他起性すなわち唯識派の言う「虚妄なる分別」とするならば、言語的表示は虚妄なる分別によってなされることを言っているにすぎない。しかし、私には言語的表示の主体が依他起性だということが理解できないが[23]、仮に、言語的に表示する主体が依他起性＝虚妄なる分別だとして、妄想されたものの言語的表示とそれの元となった虚妄なる分別との違いをことさらに言う必要があるのだろうか。すなわち、虚妄なる分別と、虚妄なる分別によって妄想されたものを言語的に表示すること、この

二つには確かに違いはあるが、その差はわずかであり、そして、その違いを円成実性に結びつけて理解することは難しい。何故なら、『三性論』は続けて、「言語的表示の除去されていることが、もう一つの他の自性（すなわち、完全に成就されたもの、円成実性）であると考えられる」[24]と言う、上記の虚妄なる分別とそれによる妄想されたものの言語的表示行為に違いがあり、かつ、この一文を文字通り解釈すると、円成実性は、虚妄なる分別は置いておいて妄想されたものの言語的表示行為を除去することで実現する、となるからである。円成実性とは、虚妄なる分別、及び虚妄なる分別による認識、すなわち能取・所取の二取による認識から離れることによって実現するのではなかったのか。であるならば、「言語的表示の除去されていることが、円成実性であると考えられる」[25]との主張は余りに安易ではないだろうか。従って、次のように言える。

（三）そのため、完全に成就されたもの（円成実性）の規定の仕方に疑問の余地が残る。

私は、円成実性の観点から、依他起性と遍計所執性の規定（定義）を見直す必要があると考える。『三性論』によれば、他によるもの（依他起性）とは、「あらわれるもの」であり、その場合、何があらわれるのかと言えば、「真実ならざる分別」があらわれるのであるから、依他起性とは「真実ならざる分別」「虚妄なる分別」なのであった。いかなる態様であらわるのかと言えば、「（主観と客観との）二つのものとしてあらわれる」のだと世親は言う。そのあらわれる態様を「遍計所執性」と規定している。私は、この二者の規定（定義）を円成実性の実現の観点から完全に変更しようというのである。

世親は『中辺分別論』において、虚妄なる分別について、次の①のように注釈し、弥勒は本頌で次の②③ように述べる。

①ここで「虚妄なる分別」というのは、知られるもの（所取）と知るもの（能取）と（の二者の対立）を分別することである。「二つのもの」とは、この知られるものと知るものとである。……「空性」とは、この虚妄なる分別が、知られるものと知るものとの両者を離脱し（両者が否定され）ている状態である。[26]

②それゆえに、それ（すなわち識）が虚妄なる分別であることが成立した。[27]

③それ（すなわち識）が滅尽することによって、解脱のあることが認められるからである。[28]

すなわち、識（＝虚妄なる分別＝所取・能取の二取を分別こと）が滅尽することが解脱である、となる。そして、「真如、実際、無相、勝義、法界」[29]と同義語である「空性」とは、「実に（主観・客観の）二つのものが無であることと、（その）無が有であること」[30]と規定している。従って、要約すると、解脱とは、能取・所取の二取で捉える虚妄分別を滅尽し、主観・客観の二つのものが実は無である、空であると悟ることである、となる。これが円成実性と言われるものである。すなわち、円成実性とは、あらゆる事物事象を捉える場合、能取・所取の二取を離れ、諸存在は実は空であると悟ることに他ならない。虚妄なる分別を離れ、能取・所取の二取を離脱することによって、諸存在の有り様は空であると悟ることである。それを『般若心経』は「色即是空」と言った。そして、空は諸存在である色を離れては存在しない。空は色そのもののとしてしか存在しない。それを『般若心経』は「空即是色」と言った。唯識派は「色即是空、空即是色」を円成実性と表現したのだと言える。であるならば、右に挙げた①の後半「「空性」とは、この虚妄なる分別が、知られるものと知るものとの両者を離脱し（両者が否定され）ている状態である」は、意味が通らない。知られるものと知るものとの両者を離脱したら、「虚妄なる分別」は「虚妄なる分別」ではなくなる。本当に言いたいことはこうなのではないだろうか。すなわち、知られるもの（所取）と知るもの（能取）の二取を離れること、その二取の根拠となっている虚妄なる分別を離れること、なのだと思う。事物事象を能取・所取の二取で捉えることも、その根拠となっている虚妄なる分別もともに認識に関わることであり、その認識の仕方を離脱することを本当は言いたいのだと思う。

四　三性説の再構築

そこで、依他起性と遍計所執性を規定（定義）し直すとこうなる。

まず、依他起性は虚妄なる分別ではなく、文字通り、他に依って起ること、すなわち、原始仏教以来言われてきた縁起のことである。従って、依他起性は認識と言うよりは存在に関わる概念である。他に依って起る現実世界を見てみよう。そこには、永久不変のものはなく、今仮にそこに他に依って存在している、他のものの縁に依ってそこに存在している、相互に依存する関係

によって存在しているだけである。それぞれの事物事象には永久不変の実体、すなわち自性はない。まさに縁によって起る縁起の世界が繰り拡げられている。これを依他起性と言って何の不都合があろうか。依他起性とは、あらゆる事物事象の存在の有り様を表す存在論なのである。

ところが、依他起性の現実世界を、能取・所取の二取で捉えると、その捉え方の根拠に虚妄なる分別がある故に、現実世界の究極の姿を捉えることはできない。事物事象にはそれぞれ独自の本質（自性）があって、他のものと区別され、区別されるが故に差別を有する、と見るのが普通の見方であるが、それが間違いである。事物事象にそれぞれ独自の本質（自性）などというものはない。あるのは、他と区分けする、区別する、井筒俊彦のいう分節する、言葉だけである。実体は何もない。実体は何もないのにあると思う。そう思うのは、人間が頭で言葉を使って分別し、区分けし、差別するからである。そうすることによって、事物事象の空なることが見えなくなり、捉えられなくなる。空を捉えられないのは、認識主体（能取）が認識対象（所取）を頭を使って言葉で区別しながら捉えるからである。この二取（能取と所取）を離れなければならない。この二取を離れられない分別が目を眩まし、真実を見えなくする。だからこそ、人間が頭で言葉を使って分別する、そのことを虚妄なる分別と言うのである。例えば現実の世界では、一旦手に入れたこれは自分のものだと我執する。あいつは莫大な財を築いたのに自分の稼ぎの何と少ないことかと歎く。あいつが出世し俺だけが隅に追いやれていると僻む。これらはすべて、縁に依って起る依他起性の世界を、無明、虚妄なる分別で見ている。それを根拠として能取・所取の二取で世界の事物事象を捉えている。そこに、我執、執着、歎き、妬みが生じる。この捉え方、認識の仕方が遍計所執性である。すなわち、原始仏教で言う無明を根拠にして、唯識派の言葉で言えば虚妄なる分別を根拠にして、能取・所取の二取で捉える認識の仕方を遍計所執性というのである。「遍計所執性」とは、「境」「（虚妄なる分別における）対象」ではなく、むしろ、他に依って起るという依他起性を有する現象世界を虚妄なる分別で捉える認識の仕方である、と規定し直すのである。

しかし、依他起性の現実世界を、能取・所取の二取を離れて見ると、そこには空性が存在する（ことが解る）。その空性は単に何もないということではなく、他に依って起る現実世界には、固定的な実体はないが、まさに相互に依存する関係、縁に依っ

て起る関係が厳としてあるのである。この実体のないこと、自性のないことを空と言い、相互に依存する関係を空性と言う。『般若心経』はこれを「色即是空」と言った。それは能取・所取の二取を離れることによって得られる。しかし、それでとどまらない。空性は現実の世界を離れてはなく、真実には、空性はまさに依他起性の現実世界そのものである。二取を遠離する時、諸法は法性であり、法性は法を離れてはあり得ず、法性は法のただ中にある。『般若心経』はこれを「空即是色」と言った。二取を遠離することで、依他起性の現実世界は法界となり、法性となる。これが真如である。唯識派はこれを円成実性と言った。円成実性は、能取・所取の二取で捉える遍計所執性を遠離する時、顕現する依他起性の現実世界の姿である。それを悟った者を仏と言うのである。また、能取・所取の二取で捉える遍計所執性を遠離する時、顕現する依他起性の現実世界の姿は、空海の言う「六大」であり、「法界体性」であり、即身成仏の当体である。

ところで、何故「再構築された」と言うのか。それは、三性説は無著・世親以前に既に『解深密経』において提示されていた。提示されていた三性説を無著・世親が変更したからである。『解深密経』において説かれた三性説の箇所を引用する。

吾當爲汝説諸法相。謂諸法相略有三種。何等爲三。一者遍計所執相。二者依他起相。三者圓成實相。云何諸法遍計所執相。謂一切法名假安立自性差別。乃至爲令隨起言説。云何諸法依他起相。謂一切法縁生自性。則此有故彼有。此生故彼生。謂無明縁行。乃至招集純大苦蘊。云何諸法圓成實相。謂一切法平等眞如。於此眞如。[31]

吾、当に汝が為に諸法の相を説くべし。謂く、諸法の相に略して三種有り。何等を三と為す。一には遍計所執相、二には依他起相、三には円成実相なり。云何、諸法の遍計所執相とは。謂く、一切法を仮に安立して名づけば自性差別なり。乃至、言説を随起せしめて為さむ。云何、諸法の依他起相とは。謂く、一切法は縁生自性なり。則ち此れ有るが故に彼有り。此れ生ずるが故に彼生ず。謂く、無明縁行なり。乃至、純大苦蘊を招集するなり。云何、諸法の円成実相とは。謂く、一切法は平等真如なり。此の真如に於て、（以下略）

まず、世尊は諸法（諸存在、あらゆる事物事象）の相について説法している。その中で、諸法の依他起相とは、一切の諸存在は縁に依りて生ずることが本質であり、此れ有るが故に彼有り、此れ生ずるが故に彼生ずという縁起法に則している。縁起の世界の中で我々人間は無明によって行為し、大きな苦を身に集めている。それが現実の姿である。それは一切の諸存在、あらゆる事物事象を目前にしたとき、ものには自性・実体があり、他のものと区別して、言葉で分別することで捉えている。それが諸法を捉える時の遍計所執相である。しかし、分別して捉えることから離脱すると、窮極的には、一切の諸存在、あらゆる事物事象は平等にして真如なのである。

『解深密経』において、依他起とは、虚妄なる分別ではなく、原始仏教以来言われて来た諸法の縁起なのである。また、遍計所執は、諸法には自性・実体があり、言葉によって他とは区別する分別が働くこと、そしてそれによる執着を言うのである。私が「再構築」と言うのは、無著・世親によって変更された三性説を元の規定（定義）に戻したいがためである。

さて、規定し直したものを前項のように図式化すると次のようになる。

依他起性＝存在論、現象世界の有り様

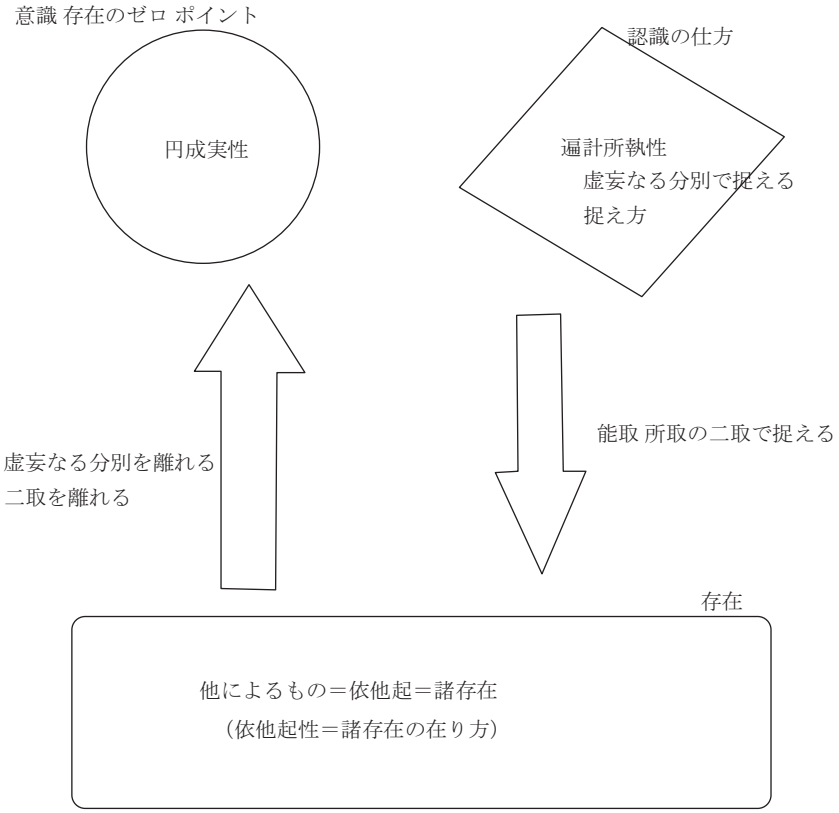
遍計所執性＝認識論、虚妄なる分別で捉える認識の仕方

これは、前項の図式化とはちょうど逆転している。どうしてこのような逆転現象が起ったのか。それは、唯識派においては認識論しかなく、存在論が存在しないからである。すべては識なのであり、対境は無なのだから（「唯識無境」）。目の前に起っている様々の存在は実は無であり、ただ識の中で起っている現象である、と唯識派は考える。従って、唯識派にとって依他起とは、識の中で起っている出来事なのである。ここに唯識派の限界があったと言える。余りにも自分の心の中、余りにも識の中に沈潜したが故に、識の中で起っていることが全世界だと捉え、識の中の現象を依他起だと見てしまったのだと推測される。

再構築された依他起性、遍計所執性、円成実性の関係を模式図で示すと次のようになる。

依他起とは他によるもので、諸存在を表す。諸存在の、相互に依存しあった関係で存在している在り方が依他起性である。

それを虚妄なる分別で捉える認識の仕方が遍計所執性である。その捉え方は、能取・所取の二取で諸存在を捉える。その根底



には虚妄なる分別があるので、執着する。我執が生じる。

ところが、虚妄なる分別を離れ、二取で捉える捉え方から離脱すると、依他起性の諸存在は、縁に依って起っているだけで、その実は、自性・実体のないもの、空であると見えてくる。これが諸存在の真実の姿である。諸存在の有り様は空としてある。この在り方及び捉え方が一致した地点が円成実性である。円成実性は、諸存在の在り方は空であるという存在論と、諸存在の有り様は空であると捉える認識論とが一致したところに実現する。それは、井筒俊彦の言う「意識・存在のゼロ・ポイント」に相当する。

五　再構築された三性説の利点と適用例

前項で規定した三性説にどのような利点があるのか。

まず、言葉を本来に意味になるように規定し直したことである。何故なら、唯識派の言う「依他起性」「遍計所執性」の規定の仕方は、言葉の元々の意味からも顛倒しているように思える。すなわちこうである。

「依他起性」とは、「他に依って起ること」「他に依って起っている現象」と捉えるのが、言葉の元々の意味で

あろう。そうであるなら、「依他起性」とは、「虚妄なる分別」ではなく、現象世界の有り様を指すものである。すなわち、「依他起性」は存在の有り様を指すのである。また、「遍計所執性」とは、「境」「（虚妄なる分別における）対象」ではなく、むしろ、他に依って起るという依他起性を有する現象世界を虚妄なる分別で捉える認識の仕方を指す、とするのが言葉の本来の意味だろう。虚妄なる分別とは、能取・所取の二取で捉える認識の仕方を指すとすれば、「遍計所執性」とは、能取・所取の二取で現象世界を捉える認識の仕方を言うことになる。すなわち、「遍計所執性」は認識に関わることであり、その認識の仕方が虚妄なる分別によるものだとということである。こう規定し直すことで、言葉本来の意味が生きてくる。

次に、依他起性＝虚妄分別、遍計所執性＝対境との唯識派の呪縛から逃れ、依他起を諸存在、あるいは現象世界とし、遍計所執性を虚妄分別と結びつける認識の仕方として、自説を展開することができる。例えば、長尾雅人は「空義より三性説へ」という論文において、「識即ち虚妄分別は、……依他起性と考えらるるものであり」[32]、『中辺分別論』相品の偈「虚妄分別は有り」以下を引用して「先ず右の虚妄分別とは、三性中の依他起性であり、これを所依として種種なる遍計所執の性が考えられる」[33]と述べるなど、明確に、依他起性＝虚妄分別としている。にも関わらず、この論文における長尾雅人の「依他起」、「虚妄分別」、「遍計所執」等の言葉遣いを見ていると、依他起を法（諸法の法、現象世界の意）に、遍計所執を虚妄分別と結びつけて説明していると思われる。例を挙げてみよう。

・「それは凡夫が、虚妄分別によって種種なる事物に遍計執するからである」[34]

もし、虚妄分別が依他起、あるいは依他起性であるならば、「凡夫は、依他起性によって種種なる事物を遍計執する」と言っても良さそうなものであるが、長尾雅人はそうは言わない。「虚妄分別によって種種なる事物に遍計執する」と言う。明らかに遍計所執性の根拠が虚妄分別であることを前提にしている。

・「依他起の上に遍計執せられたものが遠離せらるる時、円成実性の顕現がある」[35]

ここの「依他起の上に」とは、色、法、事物事象の上に、と解すべきだろう。決して、「虚妄分別の上に」の意味ではない。すなわち、「虚妄分別の上に遍計執せられた」ではなく、「事物事象の上に遍計執せられた」としなければ意味が通じない。

・「遍計執が捨離せられて円成実の顕現することは、……かく捨離せらるることは依他起性に於てあるのである」[36]

ここの「に於いて」は、場所または物に対して使う。「依他起性のある事物事象に於て」の意味であろう。「依他起性のある事物に於て虚妄なる分別によって遍計執していたことから遠離する」の意味である。

・「依他とは根本仏教以来の縁起という概念に等しい」[37]

・『中論』に於いて自性と空とが生死と涅槃として考えられ、自性空なることによって縁起法の義が示されたことは、この縁起法がまた生死涅槃の統合者と考えられねばならぬことを意味する。而してこの統合者としての縁起法が、依他起性として別立せらるることによって、三性説は完備せる形を具うることとなった」[38]

要するに、依他とは縁起であり、依他起性は縁起法であることによって、三性説が完備したとまで言っている。

・「それ故に依他起は最初虚妄分別なる識であると共に、最後に縁起法であり、かくて終にこれを中心として、生死よりの解脱が開示せらるることとなるのである」[39]

長尾雅人は、文献上「依他起は虚妄分別なる識」であることは認めざるを得ないが、「最後に」は「縁起法」である、と宣言するに至る。私から見て何とも苦しい論理である。最初から最後まで依他起は縁起であるとすればいいだけのことである。

・「かくの如くにして、法と法性との媒介者としての依他が考えられ、これを中心として大乗仏教の教理が発展せしめられた」[40]

この指摘は極めて重要である。法と法性との関係が、依他起性と円成実性との関係に等しいことを言っている。であるならば、依他起性は虚妄分別ではなく、存在論としての縁起法であるとしなけらばならない。そうしなければこの一文は理解できない。依他起性が縁起法であることを前提にすると、次の長尾雅人の主張がよく理解できる。

・「この菩薩の不住涅槃なる思想こそ、まさしく三性説、殊にその依他起性より進展すべき性質のものというべきである。不住涅槃とは涅槃にも住せず生死にも住せざるの義で、大悲の故に生死を捨せず、大智の故に生死に住せざること、不住涅槃の謂にほかならぬ。然るにかかる不住涅槃のあるべき場所としては、まさしく依他起性の世界のほかにはあり得ない。不住涅槃の根柢に横たわるものは、生死即涅槃の事実である。而して遍計は生死の世界であり、円成が涅槃であり、この両者の統一者としての

依他起性の世界なることを考え合せるならば、おのずからこれが不住涅槃の理論的根拠たることに気づかざるを得ない。[41]」

菩薩の不住涅槃なる思想について、「かかる不住涅槃のあるべき場所としては、まさしく虚妄分別の世界のほかにはあり得ない」としたのでは意味をなさない。ここはやはり、「かかる不住涅槃のあるべき場所としては、まさしく依他起性の世界のほかにはあり得ない」とすべきあり、ここの「依他起性の世界」は、苦に充ちた現実世界（生死の世界）かつ解脱を成就した涅槃の世界を指すとしなければ、生死即涅槃の媒介者とならない。

このように、長尾雅人は、依他起を法（諸法の法、現象世界の意）に、遍計所執を虚妄分別と結びつけて説明している。これは実質的な規定の変更である。しかし、彼は表面上は、依他起性＝虚妄分別、遍計所執性＝対境との唯識派の規定を否定しない。否定はしないが、実質的に変更している。これは良くない。正面から規定を正した方がすっきりする。

次に再構築された三性説に基づいて、『中辺分別論』の冒頭の本頌・注を再解釈する。その頌は、三性説の総説であり、根本であるからである。最初に漢訳、梵語からの和訳、そして、再構築に基づく解釈を挙げる。

今於此中先辯其相。頌曰

虚妄分別有　於此二都無
此中唯有空　於彼亦有此　［一・一］

論曰。虚妄分別有者。謂有所取能取分別。於此二都無者。謂即於此虚妄分別。永無所取能取二性。此中唯有空者。謂虚妄分別中。但有離所取及能取空性。於彼亦有此者。謂即於彼二空性中。亦但有此虚妄分別。若於此非有。由彼觀爲空。所餘非無故。如實知爲有。若如是者則能無倒顯示空相。[42]

そのうち、相について次のように説く。

虚妄なる分別はある。そこに二つのものは存在しない。しかし、そこ（すなわち虚妄なる分別のなか）に空性が存在し、その（空

性）のなかにまた、かれ（すなわち虚妄なる分別）が存在する。　［一・一］

ここで「虚妄なる分別」というのは、知られるもの（所取）と知るもの（能取）と（の二者の対立）を分別することである。「二つのもの」とは、この知られるものと知るものとである。（それら二つのものは究極的には実在しない。したがって）「空性」とは、この虚妄なる分別が、知られるものと知るものとの両者を離脱している状態である。「そのなかにまた、かれが存在する」とは、（空性のなかに）虚妄なる分別が存在することである。

このようにして、〝或るものが或る場所にないとき、後者（すなわち或る場所）は、前者（すなわち或るもの）としては空である、というように如実に観察する。他方また、（右のように空であると否定されたのちにも）なお（否定されえないで）なんらかあまったものがここにあるならば、それこそはいまや実在なのであると如実に知る〟という空性の正しい相が明らかに述べられた。[43]

（私釈）あらゆる事物事象の現象について、

これを認識する際、そこには虚妄なる分別があると見破ったなら、すなわち能取・所取の二取で捉えているのだと見破ったなら、そこにはもはや二つのものは存在しない。そのとき、あらゆる事物事象の究極の有り様が空性である、と悟る。空性はあらゆる事物事象において存在し、その空性の中にあらゆる事物事象が存在する。［一・一］

このように、〈或るもの＝二取で捉えた実体・自性が、或る場所＝あらゆる事物事象に、ないとき、空であると如実に観察する。また、空であると否定されても、なおそこに所余のものがあるならば、それこそが実在なのであると如実に知る〉という空性についての正しい捉え方と有り様が明確に述べられた。

（私注）依他起性の現実世界を、能取・所取の二取で捉えると、そこには虚妄なる分別がある故に、現実世界の究極の姿を捉えることはできない。しかし、依他起性の現実世界を、能取・所取の二取で捉えているのだと見破り、二取を離れて見ると、そこには空性が存在する（ことが解る）。その空性は単に何もないということではなく、他に依って起る現実世界には、固定的な実体はなく、まさに相互に依存する関係、縁に依って起る関係が厳としてあるのである。この実体のないこと、自性のないことを

空と言い、相互に依存する関係を空性と言う。『般若心経』はこれを「色即是空」と言った。それは能取・所取の二取を離れることによって得られる。しかし、それでとどまらない。空性は現実の世界を離れてはなく、真実には、空性はまさに依他起性の現実世界そのものである。二取を遠離する時、諸法は法性であり、法性は法を離れてはあり得ず、法性は法のただ中にある。『般若心経』はこれを「空即是色」と言った。二取を遠離することで、依他起性の現実世界は法界となり、法性となる。これが真如である。唯識派はこれを円成実性と言った。円成実性は、能取・所取の二取で捉える遍計所執性を完全に離脱する時に、顕現する依他起性の現実世界の姿である。それは空であり、法性であり、真如である。そして、依他起性の現実世界が空であり、法性であり、真如であるただ中に、それでもなお、所余のものが厳として存在するなら、それこそが実在なのである。

（まとめ）

従来、依他起性とは虚妄なる分別である、と規定してきたが、これを規定し直す。すなわち、依他起とは文字通り他に依って起る現象世界を言い、その有り様はまさに縁起である、縁に依って起る現象世界の有り様を依他起性である、とする。また、遍計所執性とは、対境ではなく、依他起性なる現実世界を虚妄なる分別で捉える捉え方、すなわち認識する主体（能取）と認識される客体（所取）の二取で捉え、それに執着することを指すと、規定し直す。そして、円成実性とは、虚妄なる分別から遠離し、能取・所取の二取で捉える遍計所執性から完全に離脱して、依他起性なる現実世界を見るときに現成する存在の有り様が空であると捉えることである。そこには、認識と存在が一致する極致がある。すなわち、法（諸存在）が法性であり、真如である。その極致は空でありながら、実在する。

（1）世親（荒牧典俊訳）『唯識三十論論』（『大乗仏典15』、中公文庫、二〇〇五年）、一六五頁。
（2）世親（長尾雅人訳）『三性論』（『大乗仏典15』、中公文庫、二〇〇五年）、二〇一―二〇三頁。
（3）同右、二〇五―二〇六頁。
（4）本頌の番号であるが、長尾雅人訳『中辺分別論』（『大乗仏典15』、中公文庫、二〇〇五年）に基づいて引用者が付けたものである。
（5）世親『弁中辺論』巻上、大正 No.160, 31 巻 464 頁 c 段 26 行 - 465 頁 a 段 2 行。
（6）弥勒・世親（長尾雅人訳）『中辺分別論』（『大乗仏典15』、中公文庫、二〇〇五年）、二三七頁。
（7）世親（荒牧典俊訳）『唯識三十論論』（『大乗仏典15』、中公文庫、二〇〇五年）、一六五頁、一六七頁、一六九頁。
（8）同右。
（9）世親（長尾雅人訳）『三性論』（『大乗仏典15』、中公文庫、二〇〇五年）、二〇三頁。
（10）同右。
（11）同右。
（12）弥勒・世親（長尾雅人訳）『中辺分別論』（『大乗仏典15』、中公文庫、二〇〇五年）、二三七頁。
（13）竹村牧男『『成唯識論』を読む』春秋社、二〇〇九年、四〇六―四〇七頁。
（14）竹村牧男は、遍計所執性を、結局は「もの」と捉えている。しかしながら、この「もの」は、虚妄分別の中で妄執された「もの」であって、事物事象そのものではない。すなわち、識の中で構成されたものでしかない。もっと端的に言うと、遍計所執性は「もの」ではなく、事物事象には他と区別されるそれぞれ独自の「自性」があり、それが他と区別されるが故に「差別」があり、その自性や差別を以てその事物事象を実体視する見方、捉え方を言うのではないのか、というのが私の主張である。要するに、遍計所執性は、存在論の概念ではなく、認識論の概念なのではないのか、だからこそ、「此の妄執する所の自性と差別とを、総じて遍計所執の自性と名づく」と言うのではないのか、ということである。
（15）世親（長尾雅人訳）『三性論』（『大乗仏典15』、中公文庫、二〇〇五年）、二〇三頁。
（16）同右、二一一頁。
（17）同右、二一一頁。
（18）同右、二一二頁。
（19）同右、二一二頁。
（20）同右、二一四頁。
（21）同右、二一四頁。

(22) 同右、二一七頁。
(23) 私の中に、依他起性とは文字通り他に依って起ること、すなわち、眼前に生起する事物事象の有り様を指すとの理解があるから、理解できないのだと思う。唯識派のように依他起性を虚妄分別だと思い直せば、いいだけの話なのだが。
(24) 世親（長尾雅人訳）『三性論』（『大乗仏典15』、中公文庫、二〇〇五年）、二一七頁。
(25) 世親（長尾雅人訳）『三性論』（『大乗仏典15』、中公文庫、二〇〇五年）、二一七頁。
(26) 弥勒・世親（長尾雅人訳）『中辺分別論』（『大乗仏典15』、中公文庫、二〇〇五年）、二三二―二三三頁。
(27) 同右、二三六頁。
(28) 同右。
(29) 同右、二四六頁。
(30) 同右、二四五頁。
(31) 『解深密経』巻第二、一切法相品第四、大正No.676, 16巻693頁a段。
(32) 長尾雅人「空義より三性説へ」『中観と唯識』、岩波書店、一九七八年、一九一頁。
(33) 同右、一九三頁。
(34) 同右、一九三頁。
(35) 同右、一九三頁。
(36) 同右、一九七頁。
(37) 同右、一九八―一九九頁。
(38) 同右、一九九頁。
(39) 同右、一九九頁。
(40) 同右、一九九頁。
(41) 同右、二〇〇頁。
(42) 『弁中辺論』巻上、大正No.1600, 31巻464頁b段。
(43) 弥勒・世親（長尾雅人訳）『中辺分別論』（『大乗仏典15』、中公文庫、二〇〇五年）、二三二―二三三頁。

〈キーワード〉三性説、依他起性、遍計所執性、円成実性